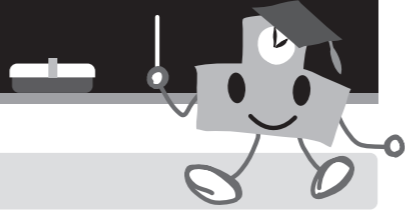


小学校の事例 北区 幌北小学校

都心の中で、自然に親しむ。共に学び、助け合い、高め合うビオトープづくり。

目標をもち自分で調べて理解し、工夫して成果を確かめる。このことを繰り返し、毎年新たなビオトープづくりを行っている。一連の流れから、自然を愛する「共生の心」を育む。



内容 都会の中で知る「自然」の大切さ

本校は札幌市の中心部にあり、校区内には自然や公園が少なく、児童が生物に触れる機会も少ない。そこで平成13年度、児童が自然に触れる場を作り、都会の中で緑が果たす役割を学習することを目的に、市内で二番目のモデル校としてビオトープが設置された。

全学年が教科の中でビオトープを活用しており、1・2年は生活科の中で「四季を観察」し、3～6年生は理科や総合的な学習の時間のなかで取り入れている。

特に3年生の理科では「季節の花を探そう」と題し、春から冬にかけて植物の成長を観察。花の名前を調べたり、見つけた花をスケッチしたり植物を観察し成長を見つめる学習を行っている。見つけた植物について「食べられるの？これは何？」と先生に聞いてくる児童も多く、関心の高さがうかがえる。



ビオトープでの学習のようす①

5年生は、毎年3学期に学校ビオトープの活動発表会で一年間どのように工夫して取り組んできたかを発表し、新5年生に引き継いでいる。新5年生は、総合的な学習の時間を使い、どのような工夫をすれば自分たちのビオトープにできるか、目標をもち、活動計画を

立てて、「調べる」→「知る」→「工夫する」→「成果を確かめる」というステップを繰り返しながら自分たちのビオトープづくりを行っている。また、北海道大学との交流として、3・5年生が学校のビオトープと北大にある規模の大きなビオトープに生息する生物や水質の比較をする機会があり、学習に深まりが生まれている。平成21年2月には全国ビオトープコンクールに応募した。5年生が秋にビオトープの整備を行い、3学期には、4年生にビオトープの活動の引き継ぎが行われる点などが高く評価され「銅賞」を受賞した。また、現地審査では本校のビオトープの中心にあるシラカバの木に注目が集まり、「このようなあたたかな雰囲気」のビオトープはない」という評価を受けた。

ビオトープは人工的につくられた川の水が池に注ぎ込まれるようになっているため、循環するための引き込み口に枯葉やごみが詰まるとすぐ故障してしまう。6年生が中心になって、休み時間にごみ拾いや落ち葉の除去などを自主的に行うことで対応している。



ビオトープでの看板

今後 ビオトープをとおして自然を愛する心を育てる

これからもビオトープを子どもの立場に立って活用していきたいと思っている。大人の目標で「使用目的をつくる」のではなく、「子どもにとって何がいいのか」を大切にしたい。

「自立と共生を育む学校の創造」と題し、体験したことを学びに生かし、問題意識をもって、気付いたことや感じたことなどから理解し、解決するためにどうしたらよいかを考えられる児童を育てることを目指している。このような活動の中から、自然を愛する「共生の心」が芽生え、共に学び、助け合い、高め合うことにつながっていくと考えている。

現在、札幌市環境教育リーダーに、昆虫の食性にあった植物や山の植物などの移植指導を受けている。今後もビオトープの運営についてアドバイスを受けながら、子供たちとビオトープの整備や観察を行っていききたい。

ビオトープを維持していく上では、整備が不可欠である。池底のゴムシート交換、修繕などは市が行っているが、集めた落ち葉を除去する時には業者に回収してもらわなければならない。しかし、維持していくための苦勞を知ることも大切な学習の一環であると考えている。



ビオトープでの学習のようす②



ビオトープでの学習のようす③

広げよう
つなげよう
環境学習の輪

実施校から
メッセージ

都会の中の学校ということで、学校ビオトープでの活動は子供たちにとって自然と会話する貴重な場となっています。各教科や総合的な学習の時間などで自然を愛し、自然と共生する心などを養う環境学習の展開を、全校的に図ることができています。